

# 同一性の基準と単純説

慶應義塾大学文学部非常勤講師  
鈴木生郎

## 本発表の目的

- ・人(person)の通時的同一性について、近年E. J. ロウとS. シューメイカーの間で交わされた論争(Lowe 2012, Shoemaker 2012a, 2012b)を検討し、評価する。
- ・そのことを通じて、(とりわけ三次元主義的な立場にとって)「**対象の同一性の基準を与える**」とはどのようなことかについて、新しい観点を示すことが目標。

## 用語の導入:「単純説」と「複合説」

- ・ **単純説**(simple theory)と**複合説**(complex theory)
- ・ 特定の種に属する対象の(通時的)同一性についての二つの対立する立場。(以下では「人」の場合に話を限る。)
- ・ この区別はParfit (1982)に由来する。後に複合説は「**還元主義**(reductionism)」、単純説は「**非還元主義**(non-reductionism)」とも呼ばれる(Parfit 1984)。

## 単純説と複合説

Parfit (1984), *Reasons and Persons* における特徴づけ

- ・ 還元主義(複合説)は、主に次の二つの主張をするもの。(p. 210)
  - (1) ある人の時間を通じた同一性についての事実は、何らかのより個人的な事実が成り立っていることに存する。
  - (2) これらの事実は、その人の同一性を前提せずに、さらには、その人の人生に含まれる経験がその当人によってもたれているということや、当人が存在するということに明示的に言及することなく記述可能である。すなわち、これらの事実は非人物的(impersonal)な仕方でも記述できる。
- ・ 他方、非還元主義(単純説)は、この両方を否定するものとして特徴づけられる。

## 単純説と複合説

- 実際には、パーフィットの特徴づけには曖昧さがあり、両者の正確な特徴づけについては議論の余地がある。(Gasser and Stefan 2012に所収されているOlson, Noonan, Zimmermanの論文を参照。)
- とはいえ、ここでの目的は、両者に正確な区別を与えることではない。単純説と複合説の区別に含まれる重要な要素を取り出し、それに基づいてシューメイカーとロウの争点を明確化することが主眼。
- その準備として、まず「**同一性の基準**」という考えを導入する。

## 同一性の基準

- 一般に、ある種Kに属する対象の(通時的)同一性の基準は、次のような形をとる。(ここで、 $x$ と $y$ は共に種Kに属し、 $x$ は時点 $t_1$ に、 $y$ は時点 $t_2$ に存在するものとする。外側の必然性オペレータは省略。)

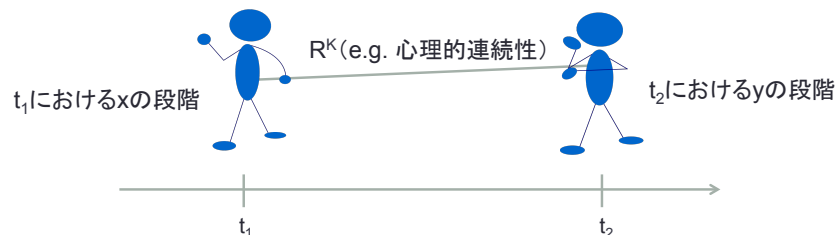
$$x=y \text{ iff } R^K(t_1 \text{ における } x \text{ の段階, } t_2 \text{ における } y \text{ の段階})$$

- 右辺に現れる「 $t_1$ における～の段階(stage)」は、ひとまず四次元主義風に、「時点 $n$ に存在する対象のスライス」のようなものを思い浮かべてほしい。(この点については後で詳しく論じる。)
- $R^K$ 関係は、種Kに属する対象の同一性にとって本質的な関係のこと。たとえば人の同一性に関する心理説が成り立つならば、 $R^K$ はなんらかの心理的連続性であることになる。

## 同一性の基準

- より簡単にいえば、人の同一性の基準は、同じないし異なる時点にいる人の同一性を、それぞれの時点に存在する段階の間に成り立つ特定の関係に結びつけるもの。

$x=y$ という事実を、次のような事実に結びつける。



## 複合説に含まれるもの(1)

- 人の同一性についての複合説は、人の同一性の基準について次の三つの主張が成り立つと主張する。(Cf. Olson 2012. オルソンは(A)と(C)を区別していないが、それを区別することがここでの重要なポイント)
- (A) **基準の存在**: 人の同一性については、トリヴィアルではない同一性の基準が存在する。
- (B) **根拠づけ**: 人の同一性の基準は、人の同一性をその根拠となるより基礎的な事実に基づいて(非対称的な仕方)で説明するもの。
- (C) **非循環性**: 人の同一性の基準は、説明されるべき人の同一性を前提せずに、人の同一性を説明するもの。
- 以下、それぞれについて説明を与える。

## 複合説に含まれるもの(2)

(A) **基準の存在**: 人の同一性について、トリヴィアルではない同一性の基準が存在する。

- ・トリヴィアルであることの一般的な説明は難しく、この点は後にも問題になるが、たとえば、次はトリヴィアルな基準の典型。

$$x=y \text{ iff } x=y$$

こうした基準がトリヴィアルであるのは、説明すべきことがらをあからさまに前提しており、まったく何の情報も与えていないから。

- ・トリヴィアルでない同一性の基準の存在は、複合説の基本的な前提。これがなければ、次の(B)や(C)を主張できない。

## 複合説に含まれるもの(3)

(B) **根拠づけ**: 人の同一性の基準は、人の同一性を、その根拠となるより基礎的な事実に基づいて説明するもの。

- ・一般に同一性の基準は(必然的)同値関係の形をとるが、

$$x=y \text{ iff } R^k(t_1 \text{ における } x \text{ の段階, } t_2 \text{ における } y \text{ の段階})$$

(B)によれば、これは「 $x=y$ であるのは、 $t_1$ における $x$ の段階と $t_2$ における $y$ の段階が $R^k$ 関係に立っているからだ」という**非対称的な根拠づけ関係**を表すものとして理解される。

- ・これは、先のパーフィットの特徴づけの(1)のストレートな解釈。

(1) ある人の時間を通じた同一性についての事実は、何らかのより個別的事実が成り立っていることに**存する**。

## 複合説に含まれるもの(4)

(C) **非循環性**: 人の同一性の基準は、説明されるべき人の同一性を前提せずに、人の同一性を説明するもの。

- ・これは、パーフィットの特徴づけの(2)に含まれているもの。
  - ・(2) これらの[同一性が存するところの個別的]事実は、その人の同一性を前提せずに[...]記述可能である。すなわち、これらの事実は非人物的(impersonal)な仕方では記述できる。
- ・(C)を認めるならば、人の同一性基準の右辺、すなわち

$$R^k(t_1 \text{ における } x \text{ の段階, } t_2 \text{ における } y \text{ の段階})$$

は、説明されるべき人の同一性を前提せずに特定されなければならない。

## 単純説と複合説

- ・一般に、(A) 同一性の基準の存在、(B) 根拠づけ、(C)非循環性の三つは**一体のもの**として扱われることが多い。
- ・そのため、**複合説は(A), (B), (C)のすべてを認める立場**として捉えられ、それに対して**単純説は(A), (B), (C)のすべてを否定する立場**として捉えられてきた。
- ・実際、単純説を擁護する口は、これらすべてを否定する。他方シューメイカーは、これらすべてを認めることで、複合説を擁護しようとする。

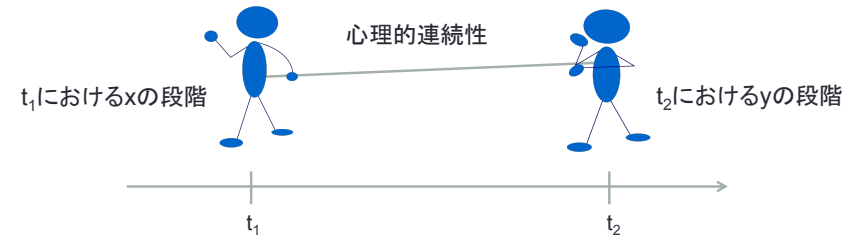
## ロウの議論(1)

- ロウの議論の標的は、シューメイカーが擁護する**三次元主義的な複合説**(Lowe 2009, chap. 8; Lowe 2012. ロウは四次元主義を拒否するが、その議論についてはたとえば、Lowe (1998), chap. 5を参照)。
- ロウは、シューメイカーの与える複合説的な同一性基準が**循環**を含み、したがって先の(A), (B), (C)の主張を保持できないと論じる。
- 以下ではその議論を(かなり単純化した仕方)で再構成する。

## ロウの議論(2)

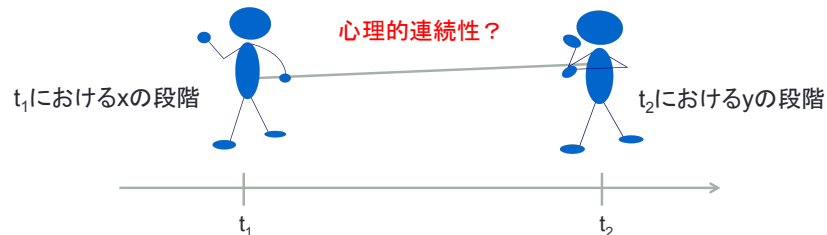
- 一般に、複合説は人の同一性について次のような説明を試みる。(ここでは、人の同一性についての心理説が正しいと仮定する。)

$x=y$ という事実は、以下の事実に基づく。



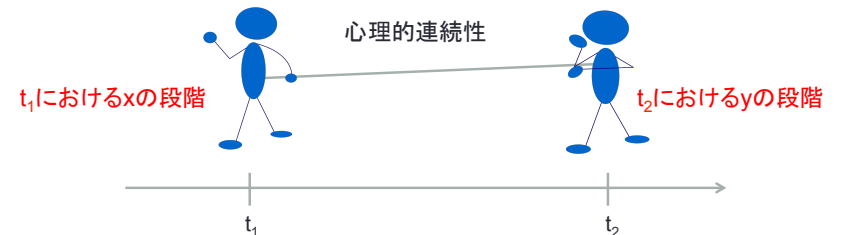
## ロウの議論(3)

- 心理説には、(記憶を含む)心理的連続性は同一性を前提としているという古典的批判があるが、ロウの議論の焦点はそこではない。
- この点に関する循環の疑いは、たとえばShoemaker (1984)における「擬似記憶」に基づく分析等によって晴らされていると主張する。(少なくともここではこの点は問題にしない)。



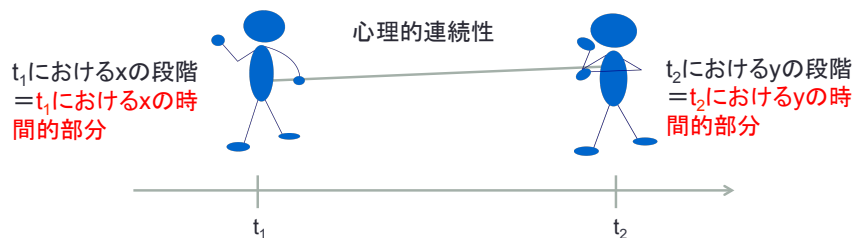
## ロウの議論(4)

- ロウが循環の疑いを向けるのは、むしろ心理的連続性の関係項となる「段階」の特徴づけ。(Cf. Della Rocca 2011)



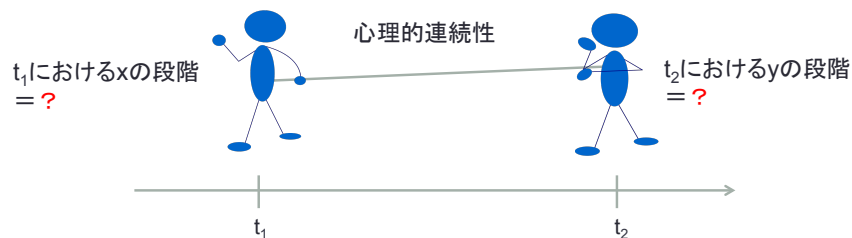
## ロウの議論(5)

- ・四次元主義者であれば、「 $t_1$ における～の段階」が指すのは、**その瞬間のみに存在する時間的部分**。
- ・時間的部分は、それが構成する個々の人(四次元ワーム)よりも**基礎的な対象**であり、その同一性は、説明されるべき人の同一性とは**独立に**(その真部分の同一性に基づいて)理解できる。



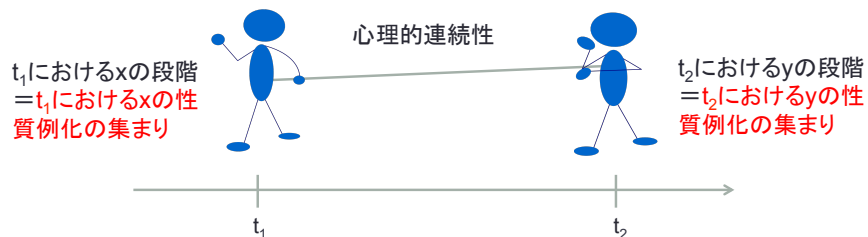
## ロウの議論(6)

- ・しかし、シューメイカーのような三次元主義者は、時間的部分を(少なくとも「人」より基礎的な存在者としては)認められない。
- ・すると、三次元主義者には、段階をどのようなものとして理解するかという問題が生じる。



## ロウの議論(7)

- ・シューメイカーは、各瞬間に存在する「段階」を、性質例化 (property instance) の集まりと同一視。
- ・人はある時点において様々な性質(とりわけ心理的性質を含む様々な性質)を例化している。ある人の段階は、こうした性質例化の集まり。



## ロウの議論(8)

- ・ロウが問題視するのはこの点。ロウによれば、性質例化は、性質を例化している主体より基礎的な存在者ではありえない。むしろ、性質例化の同一性は、人の同一性を前提する。
- ・**性質例化の同一性基準**として自然なのは、たとえば、性質例化の同一性を、質的類似性と、例化されている時点と、その**性質例化の主体(つまり人)の同一性**に基づいて説明するもの (Lowe 2012, pp. 149–151. 以下の式は文脈に合わせて若干修正した)。

任意の性質例化 $x$ と $y$ について、( $x=y$  iff  $x$ と $y$ が質的に不可識別であり、かつ、人 $P_1$ 、 $P_2$ 、時点 $t_1$ 、 $t_2$ が存在し( $P_1$ が $t_1$ において $x$ をもつ)、かつ、( $P_2$ が $t_2$ において $y$ をもつ)、かつ、( $P_1=P_2$ ) かつ( $t_1=t_2$ ))

## ロウの議論(9)

- 以上の議論が正しいならば、シューメイカーの与える同一性の基準はある種の循環を含む。
- 人の同一性は性質例化の間に成り立つ関係に基づいて説明されるが、その性質例化の同一性は人の同一性に基づいて説明される。
- シューメイカーの基準に倣って人の同一性を説明しようとするならば、人の同一性に先立ってどの性質例化について語っているのかを特定できなければならない(性質例化の同一性を特定できなければならない)。しかし、それを特定するためには、その性質例化の主体である人が同一かどうかすでに特定されていなければならない。

## ロウの議論(10)

- 以上より、ロウは、シューメイカーが与える人の同一性の基準については、(C)の非循環性の主張は成り立たないと論じる。
- その同一性の基準が循環している以上、人の同一性をより基礎的な事実によって根拠づけることにも失敗しており、(B)の根拠づけの主張も成り立たない。
- さらに、同一性の基準が循環しているならばそれはトリヴィアルであるため、(A)の、トリヴィアルではない同一性基準の存在も擁護できていないとロウは主張する。

## ロウの議論(11)

- もちろん、以上の議論は、「三次元主義者が人の同一性に非循環的な説明を与えることは一般に不可能である」ことを示すまでのものではない。そのことはロウも認める。(Lowe 2012, pp.151–2)
- しかし、ロウは、こうした非循環的説明の成功に懐疑的。人は**存在論的に原初的な実体**であり、人については非循環的な同一性基準は存在しないと考えるべきだと主張する。
- 実際、ロウによれば、人は同一性の基準をもたないだけでなく、部分すらもたない究極的な「単純者」でもある。(Cf. Lowe 2001)

## シューメイカーの反論(1)

- こうしたロウの議論に対してシューメイカーの反論のポイントは二つ。(Shoemaker 2012a, 2012b)
  - (i) 人について、同一性の基準がまったく存在しないと主張する(つまり、先の(A)を否定する)ことは極めて法外であり、受けいれがたい帰結をもつ。(2012a, pp.126–7)
  - (ii) シューメイカーが与える同一性の基準が循環しているというロウの批判は誤解であり、実際には循環は含まれていない。(2012a, pp.132–4)

先に結論を述べるならば、(i)の論点はかなり説得的に思われるが、(ii)の議論は(少なくとも現状では)不明瞭。

## シューメイカーの反論(2)

- (i) 同一性の基準の存在を否定することの反直観的帰結。  
(Cf. Della Rocca 2011)
- もし人の同一性の基準の存在を否定するならば、人の同一性は、いかなる心理的(ないし物理的)連続性とも**独立に**成立していることになる。
- すると、完全な心理的／物理的連続性が成り立っているにもかかわらず、xとyが同一ではない可能性(あるいは、何の連続性も成り立っていないが、xとyが同一である可能性)を排除できないことになる。
- しかしこれを認めることは、人の同一性についての私たちの認識を極めて困難なものにする。ある対象とある対象の間にとどのような連続性を観察したとしても、両者が同一でないことがありうることになるから。

## シューメイカーの反論(3)

- (ii) 同一性の基準に循環は含まれていない。
  - シューメイカーは次の二点を主張している(と思われる)。
    - (1) ロウが指摘する「循環」は非常に一般的なものであり、もしそれが循環であるならば、ほとんどの種の対象についても、(三次元主義的な)複合説は循環していることになってしまう。(2012a, pp. 132-3.)
    - (2) 段階(性質例化)の同一性が人の同一性によって決まることを認めたとしても、その同一性には人の通時的同一性は前提されていない。したがって、そこには循環はない。(2012a, p. 133; 2012b)
- しかし、(1)は反論としては十分ではない(ロウも応答している)。また、(2)についてはそれがどのようなことなのかについてさらなる詳細な説明が必要。

## シューメイカーの反論の評価(1)

シューメイカーは循環の問題についてロウが提起している重要な問題に答えていないように思われる。

- 複合説は、「人の同一性は、人の同一性を前提しない、より基礎的な事実に基づいて説明される」という立場にコミットする。
- すると、ロウのように、「基礎的な事実に含まれる存在者(心理的連続性や段階)が、人の同一性を前提せずに個別化される」ことにも複合説がコミットしていると考えるのは正当。
- シューメイカーが複合説を擁護するならば、人の同一性に依存していない基礎的な存在者を用意し、その間に成り立つ(人の同一性を前提しない)課題に基づいて人の同一性を説明するべきでは？

## シューメイカーの反論の評価(2)

- したがって、シューメイカーは、(ii)の論点、「すなわち自身の同一性の基準が循環を含まない」ということを示すことに成功していないように思われる。
- 他方、シューメイカーの(i)の論点、すなわち、「同一性の基準の存在を否定することは反直観的な帰結をもたらす」という点については、ロウは反論を与えていない。
- 実際この帰結は、シューメイカーの論じる通り受け入れがたいものであるように思われる。



## ここまでの議論のまとめ(1)

- ロウによれば、シューメイカーが与える(三次元主義的な)人の同一性基準は、人の同一性を前提しており、循環している。
- ロウは、このことは、人の同一性をより基礎的な事実に基づいて非循環的に説明することはできないことを示すと考える((B)、(C)の否定)。
- そしてそこから、トリヴィアルではない人の同一性基準は存在しないと結論する((A)の否定)。

## ここまでの議論のまとめ(2)

- これに対してシューメイカーは、人の同一性について、トリヴィアルではない同一性条件の存在を否定(つまり、(A)を否定)してしまうと、我々の同一性の理解が困難になることを指摘。
- しかし他方で、シューメイカーは、自身の人の同一性の基準が、人の同一性を、より基礎的な事実に基づいて循環を含まずに説明するものであることを十分に示せてはいない。((B)、(C)を擁護できていない)

## ここまでの議論の評価

- 私は、シューメイカーの与える人の同一性基準が、「人の同一性に対して、その根拠を与えるような非循環的な説明を与えられていない」ということについて、ロウの議論にかなり説得されている。
- しかし他方で、(A)の主張、すなわち、人の同一性の(トリヴィアルでない)基準が存在することを完全に否定してしまうことは、シューメイカーと同様に受け入れたくない。

...では、どう考えるべきか

## 同一性の基準の緩やかな理解(1)

- すでに述べたように、同一性基準は次のような形をとる。

$$x=y \text{ iff } R^K(t_1 \text{ における } x \text{ の段階, } t_2 \text{ における } y \text{ の段階})$$

- 複合説は、この同一性基準について、次の三つの主張をする。
  - (A) **基準の存在**: 人の同一性については、トリヴィアルではない同一性の基準が存在する。
  - (B) **根拠づけ**: 人の同一性の基準は、人の同一性をその根拠となるより基礎的な事実に基づいて説明するもの。
  - (C) **非循環性**: 人の同一性の基準は、説明されるべき人の同一性を前提せずに、人の同一性を説明するもの。



## 同一性の基準の緩やかな理解(2)

私の提案は、(B)、(C)を否定するが(A)を保持するような次のような立場が擁護可能であるということ。

- (A) **基準の存在**: 人の同一性については、トリヴィアルではない同一性の基準が存在する。
- (B) **根拠づけ**: 人の同一性の基準は、人の同一性をその根拠となるより基礎的な事実に基づいて(非対称的な仕方)で説明するもの。
- (C) **非循環性**: 人の同一性の基準は、説明されるべき人の同一性を前提せずに、人の同一性を説明するもの。

もしこうした立場が可能であれば、ロウの議論を大筋で認めつつ、シューメイカーの懸念を払拭できる。

## 同一性の基準の緩やかな理解(3)

これはつまり、

$$x=y \text{ iff } R^K(t_1 \text{ における } x \text{ の段階, } t_2 \text{ における } y \text{ の段階})$$

という同一性の基準を、次のように**緩やかに**理解するということ。

- 同一性の基準は、必ずしも対象の同一性をより基礎的な事実によって説明するものでなくてもよいし、循環を含んでいてもよい。
- 同一性の基準は、同一性が存しているところの根拠を非循環的に特定するものではなく、むしろただ単に、同一性が何らかの連続性( $R^K$ 関係)と必然的に相関していることを記述するだけのものでありうる。

## 示すべきこと

- こうした立場が擁護可能であることを示すには、少なくとも以下の三点を示す必要がある。
  - (a) 循環を含む同一性の基準が、トリヴィアルではないことがありうること。
  - (b) こうした循環を含む同一性の基準を許容するならば、シューメイカーの懸念は払拭できること。
  - (c) ある種の対象についてこうした循環を含む同一性基準が成り立つことについて、それが形而上学的にどのような事態なのかについて明確な描像が与えられること。

以下では、それぞれに対する解答を素描する。

## 循環した基準は常にトリヴィアルか？(1)

- (a)と(b)は、同時に示すことが可能。そのために、次のような人の同一性の基準が正しいと仮定する。
  - (P)  $x=y$  iff  $t_1$ における $x$ の段階と、 $t_2$ における $y$ の段階の間に心理的連続性が成り立つ。
- さらに、ロウが主張するように、この同一性の基準が循環を含み、人の同一性が存するところの根拠を述べるものではないことも仮定する。

## 循環した基準は常にトリヴィアルか？(2)

- 問題は、このように理解された(P)がトリヴィアルか否か。
  - トリヴィアルであることの一般的特徴づけは困難だが、この場合に(P)のトリヴィアルではないことは、比較的明らかにみえる。
  - この基準と次の真にトリヴィアルである基準と比べてみよう。

$$(T) x=y \text{ iff } x=y$$

- この基準は、ある人とある人が同一であるのは、両者が同一のとき、かつそのときのみだということ以上のことを何も述べていない。
- さらに、もし人の同一性についてこれ以上のことが何も言えないとしたら、確かに、人の同一性はいかなる連続性とも独立であることになるだろう。

## 循環した基準は常にトリヴィアルか？(3)

- (T)と比べると(P)は明らかに(T)以上の情報を含んでいる。
  - (P)  $x=y$  iff  $t_1$ における $x$ の段階と、 $t_2$ における $y$ の段階の間に心理的連続性が成り立つ。
- (P)は、 $x$ と $y$ が同一であることと、両者の段階の間に心理的連続性が成り立つことが**必然的に相関している**ことを述べているから。
  - これは、(T)には含まれない**実質的な主張**。
  - 実際、もし(P)が成り立つならば、シューメイカーが懸念する可能性(心理的連続性が成り立つにもかかわらず同一ではない／心理的連続性が成り立っていないが同一でありうる)は**排除される**。

## 循環した基準は常にトリヴィアルか？(4)

- したがって、先の二点は成り立つように思われる
  - (a) 循環を含む同一性の基準がトリヴィアルではないことがありうる。
  - (b) こうした循環を含む同一性の基準を許容するならば、シューメイカーの懸念は払拭できる。
- (P)のような同一性基準は、循環を含むとしても、同一性と心理的連続性の必然的相関についての**トリヴィアルではない**主張を含む。
- さらに、(P)のような同一性基準を認めるかぎり、シューメイカーが問題視した可能性はないことを示すことができる。

## 形而上学的描像(1)

- 人についてこうした循環を含む同一性基準が成り立つことを認めることは、形而上学的にどのような立場に立つことなのか？
- この点を完全に明確にすることは本発表では難しいが、いくつかの重要なポイントを指摘する。

## 形而上学的描像(2)

- (P)のような同一性の基準が循環を含むことを認めるということは、人の同一性が、より基礎的なものに根拠づけられていない**原初的なもの**だと認めること。
- 人は存在論的に基礎的であり、たとえば、「性質例化」といった別のものについての事実によってその同一性を説明することはできない。むしろ、性質例化の方がより派生的な存在者であり、その同一性は人の同一性に基づいて理解される。
- その意味で、このときに人は、古典的な意味で「**実体(substance)**」、に近いものとなる。

## 形而上学的描像(3)

- 他方で、(P)のような(循環を含む)同一性の基準を認めることは、**原初的な存在者は、様々な連続性に必然的に繋ぎ止められていないなければならない**ことを認めること。
- これは、原初的な存在者を認めることが不可解な存在者を認めることではないと論じるために認めるべき自然な制約だと思われる。
- このことを認めるならば、段階の間に成り立つ様々な連続性を把握することが、どうして人の同一性の判断にとって重要なのかを、問題なく理解することができる。

## 形而上学的描像(4)

- 一般に、ほとんどの形而上学的立場は、何らかの**原初的な存在者が存在することにコミット**する。
  - ある種の対象の同一性をより基礎的な存在者の同一性によって説明するというプログラムは、一般に、もっとも基礎的な存在者のレベルで止まる。こうした基礎的存在者は原初的なものとみなされる必要がある。
- こうした原初的な存在者を、ロウのようにあらゆる連続性から独立に存在するものと見なすことはもっともらしくない。
- 本発表で提示した同一性の基準についての見方は、こうした存在者について、それが何らかの連続性によって制約されていることを認められる。これは、この見方の利点。

## 本発表で示したこと

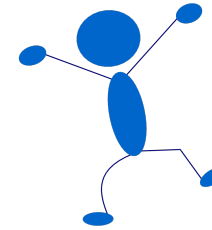
- シューメイカーが提示する三次元主義的な人の同一性基準が、循環を含んでおり、人の同一性をより基礎的な事実によって説明することに成功していないというロウの議論は説得的。
- しかし、ロウのように、そこから人の同一性にはいかなる同一性の基準もないと結論するのは誤り。人の同一性を様々な連続性と完全に切り離してしまうことは、シューメイカーが主張するように受け入れがたい。
- 循環を含むがトリヴィアルではない同一性の基準を許容するならば、ロウのように人の同一性を原初的なものと認めつつも、人の同一性を様々な連続性と結びつけたものとして理解することができる。

## 今後の展望

- 私は、シューメイカー自身の人の同一性についての立場(e.g. Shoemaker 1979)が、ここで素描した「緩やかな同一性の基準の捉え方」と親和的だと考えている。この点はさらに明確化が必要。
- 本発表では、同一性の基準に含まれている「循環」については、まだ直観的理解に留まっている。この点を明確化することも本質的な課題。

## おわり

ご清聴ありがとうございました！



## 参考文献

- Della Rocca, M. 2011. "Primitive Persistence and the Impasse between Three-Dimensionalism and Four-Dimensionalism," *Journal of Philosophy* 108: 591–616.
- Gasser, G and M. Stefan (eds.) 2012. *Personal Identity: Complex or Simple?*, New York: Cambridge University Press.
- Horsten, L. 2010. "Impredicative Identity Criteria," *Philosophy and Phenomenological Research* 80: 411–439.
- Jubien, M., 1996. "The Myth of Identity Conditions," *Philosophical Perspectives* 10: 343–56.
- Merricks, T. "There Are No Criteria of Identity over Time," *Noûs* 32: 106–24.
- Lowe, E. J. 1989a. "Impredicative Identity Criteria and Davidson's Criterion of Event Identity," *Analysis*, 49: 178–81.
- Lowe, E. J. 1989b. "What is a Criteria of Identity?," *Philosophical Quarterly* 39: 1–21.
- Lowe, E. J. 1998. *The Possibility of Metaphysics: Substance, Identity, and Time*, NY: Oxford University Press.

## 参考文献

- Lowe, E. J. 2001. "Identity, Composition and the Simplicity of the Self," in K. Corcoran (ed.) *Soul, Body, and Survival: Essays on the Metaphysics of Human Person*. Ithaca, NY: Cornell University Press, pp. 139–58.
- Lowe, E. J. 2009. *More Kinds of Being: A Further Study of Individuation, Identity and the Logic of Sortal Terms*. Malden, MA: Blackwell.
- Lowe, E. J. 2012. "The Probable Simplicity of Personal Identity," in Gasser and Stefan (eds.), pp. 137–56.
- Noonan, H. 2012. "Personal Identity and Its Perplexities," in Gasser and Stefan (eds.), pp. 82–101.
- Olson, E. J. 2012. "In Search for the Simple View," in Gasser and Stefan (eds.), pp. 44–62.
- Parfit, D. 1982. "Personal Identity and Rationality," *Synthese* 53: 227–41.
- Parfit, D. 1984. *Reasons and Persons*. Oxford University Press.
- Shoemaker, S. 1979. "Identity, Properties and Causality," *Midwest Studies in Philosophy* 4: 321–42; reprinted in his *Identity, Cause, and Mind*, expanded edn. Oxford: Clarendon Press, 2003.



## 参照文献

- Shoemaker, S. 1984. "Personal Identity: A Materialist's Account," in S. Shoemaker and R. Swinburne, *Personal Identity*. Oxford: Blackwell, pp. 67–132.
- Shoemaker, S. 2012a. "Against Simplicity," in Gasser and Stefan (eds.), pp. 123–36.
- Shoemaker, S. 2012b. "Reply to E. J. Lowe," in Gasser and Stefan (eds.), p. 156.
- Zimmerman, D. 2012. "Materialism, Dualism, and "Simple" Theories of Personal Identity," in Gasser and Stefan (eds.), pp. 206–35.